2012 年 3 月 20 日（火）

South Brunswick High School

South Brunswick High school は、2011 年ニュージャージーキャラクターエデュケーション優秀校である。学校の玄関の上、オフィスの中の 2 か所に優秀校であることを証明するポスターが貼ってあった。

◎あいさつ

この学校の校長である Mr. Tim Matheney とお会いし、学校見学を歓迎していただいた。校内見学では、校長のアシスタントである Mr. Peter Varela と、この学校の生徒で Student Council President の Ian Moritz と State Student Council Representative の Tessa Trach,が案内してくれた。学校はとても広かった。また廊下にはロッカーがあったり、ポスターが貼られていたりした。

◎Grobal Study Class-grade11：Ms.Samantha Saldanha-Kuncharam

今は、東アジアについて学んでおり、この日は中国について勉強しているところだった。まず、中国の映像を見て、先生が発問し、それに対して自分の考えや知っていることを生徒が答えていた。

壁には各国のポスターが貼られていた。日本のことも勉強するようで、日本語で書かれたポスターもあった。

◎2012 South Brunswick Reads：Ms. Manganello, Media Specialist

今年の課題図書は、“不思議の国のアリス”である。なぜなら、この本は世界各国で出版され、子どもから大人までみんなが楽しめる本だからだ。また、アリスのようにどんな困難に遭っても、それを乗り越えていく力を身につけてほしいという思いが込められている。　図書館には、不思議の国のアリスの本やビデオなどが多数置かれ、壁にも説明書きがあった。また、この高校の図書館は、公立の図書館と連携したり、小学生が訪問したりすることもあるそうだ。

◎Cupcakes for Japan Service Project

東日本大震災のためのファンドレージング。生徒たちの提案で企画され、実行された。写真の左側に写っているのが、このプロジェクトを中心で企画した女生徒である。

この地域で人気のあるカップケーキを仕入れ、学校で販売し、その収益を募金してくれた。合計で 600 個以上売れたそうだ。

◎Honors Concert Choir—Ms. Ginny Kraft, Music Specialist

この聖歌隊は、“Don’t Laugh at Me”という曲を歌ってくれた。背が低くても、高くても、太っていても、痩せていても、どんな人でも、翼が生えて未来に飛び立っていく。だから、違うことをバカにしてはいけない、という思いが込められた歌詞であった。高校生たちの歌声はとても力強く、きれいで鳥肌が立つぐらい感動した。

◎Student Government/Leadership/Activities：Ms. Lauren Morris

ここで、生徒は時間割やボランティアなどの情報を得たり、質問をしたり、この高校の T シャツやパーカーを買ったりすることができる。さらに、ここでは Cupcakes for Japan Service Project のように生徒たちが提案してきたこと実現できるように、アドバイスを与えたり、手伝ったりすることもしている。チラシやポスターなどの作成や掲示物を作ったりするための作業スペースもある。

◎廊下の掲示物

学校内を歩いていて、よく目についたのが廊下の壁や掲示物である。生徒たちが製作したものが多く、学校の雰囲気を明るく温かくしているような感じがした。

右の写真の壁は、玄関を入ってすぐの廊下にあったもので、いろとりどりの手形が非常に印象的であった。SBHS Helping Hands とは、卒業生が母校であるこの高校に寄付をすることで、この壁の手形は、寄付をしてくれた人のものである。

次に、1 番目にしたのが、“運転中にメールを打つな！”という呼びかけのポスターである。この高校では事故が多いのか？と Ian に訊ねてみたところ、事故はほとんどないらしい。しかし、17 歳から免許が取れ、車に乗って登下校する高校生の中には、危険な運転をする生徒もいる。また全国的に、メールをしながら運転していて、事故に遭うケースは年々増えているそうだ。そこで、車の運転という責任のある行為をすることを自覚させ、注意を呼び掛けるために、ポスターを作成している。また、このポスターは、廊下や階段や踊り場などに貼られており、それぞれのポスターでデザインやキャッチフレーズが違っており、工夫されていた。

左の写真のポスターは“Don’t be the one that go a way”＝“バカなことはするな”、“Be Responsible”＝“責任を持って”と書かれており、その周りの小さな紙には、高校生がメールでよく使っている短縮用語（例えば 4get=forget, PPL=People など）が書かれていた。

Monmouth Junction Elementary School

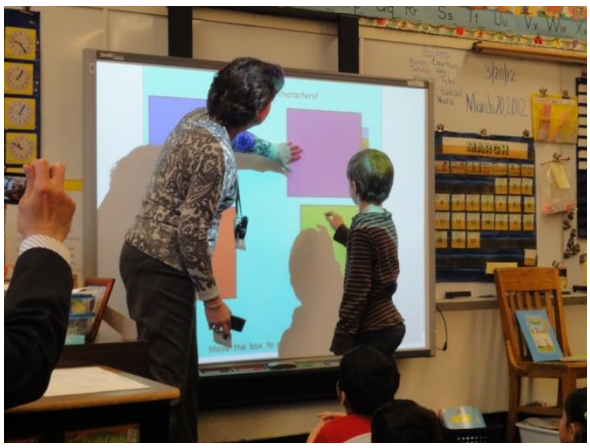
◎Shared Reading Actinvity with SMART Board instruction-1Grade:Mrs.Debra Miller

この日、取り扱われていた教材は“Owen”というねずみの男の子話である。Owen は、学校にお気に入りのタオルケットを持って行きたがっている。しかし、学校にはそれは必要ではない。そこで、彼のお母さんは、彼のためにタオルケットを切って、縫って、小さなハンカチにした。Owen はそれを喜んで学校に持っていった、という話である。写真①はその話を聞いているところである。

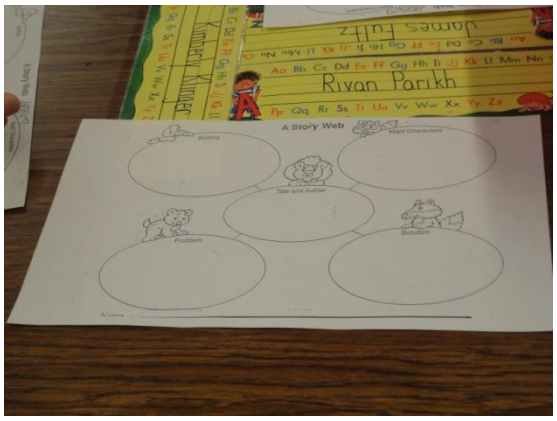
次に、登場人物やストーリー、Owen に起きた問題やその解決方法について、クラスのみんなで確認していく。その際に使われていたのが、電子黒板であった色のついたパネルを動かして、確認していった。(写真②)

その後、個人での作業にうつる。配布されたプリント(写真③)に、同じように登場人物や起きた問題や解決方法を書きこんでいく。(写真④) 児童に、登場人物やストーリーなどの状況確認や、問題とその問題の解決方法を繰り返し訊ねて把握させることが重要視されているように感じた。

写真①



写真②



写真③

写真④

◎Morning Meeting with Team Building Activity-kindergarten:Mrs.Patti Schuhl

このクラスでは、保護者に許可をとっていないため、子どもたちの写真やビデオを撮ることができなかった。

Morinig Meeting は、Resposive Classroom の一つである。私達が訪問した際にこのクラスでしたことは、“あいさつゲーム”である。

まず、子どもたちは、アルファベットの書かれたタイルの上に、円形になって座る。そして、それぞれ片方ずつ靴を脱ぎ、中央に置く。まず、先生が 1 足の靴を選び取り、その靴の持ち主を探す。持ち主を見付けたら、“Good morning, A（名前）”と握手しながらあいさつをする。言われた相手も“Good morning,B（名前）”とあいさつを返す。それが終わったら、次に B が 1 足の靴を選んで、持ち主を探し、同じようにあいさつする。それを繰り返していく。

子どもたちは、ほぼ全員が恥ずかしがることなく、元気にあいさつをしていた。あいさつする時には、相手の目をしっかり見ることが大切だと、先生は教えていた。

また、このクラスの扉には、左の写真のような Class rules のポスターが貼られていた。ポスターには、“Take care yourself.”＝“自分を大切にすること”、“Take care of each other.”＝“お互いに思いやること”、“Take care of our room.”＝“自分たちの部屋を大切にすること”、“Always do your best.”＝“いつでも全力を尽くすこと” と書かれている。これは、部屋の扉に貼られているので、いつでも子どもたちの目に入る。そして、ポスターは子どもたちが作成したものである。幼稚園児であっても、自分や他の人や自分の周りのものを大切にし、最善を尽くすことを心がけ、決まり事を守ることが大切にされているようであった。

◎Book Check Program

この学校では、Book Check Program というプログラムがある。児童がそれぞれ読書した時間を足す。写真のように、Mr.Spinner のクラスは、学年の中で 1 番読書時間が多く、2 週間で合計 2179 時間であり、表彰されている。

また、Book Fair を開催し、児童は好きな本を選び、紙に記入し、保護者に買ってもらう。その収益で、著者を招いたり、新しい本を購入したりしている。

この学校では、保護者との連携に力を入れているので、このようなプログラムには、保護者がボランティアとして参加している。

◎日本人の児童と文化

ここの学校には、3 年生に日本人の児童がいる。私達が、校長先生からいただいた学校紹介の DVD の表紙は、きれいな桜模様であり、日本人の児童が作ってくれたそうだ。この地域には、インド人や中国人の住民は多いが、日本人少ないそうだ。、今回、会うことができなかったが、ぜひ会って話してみたかった。

また、廊下には俳句の書かれた掲示物があり、日本の文化である俳句を勉強していることをうれしく思ったと同時に、どのように教えられ、どう児童は感じているのか知りたいと思った。

Monmouth Junction school にて記念撮影：伴先生、Mrs.Maribeth、押谷先生、Mr.Brown

Lore Elementary School

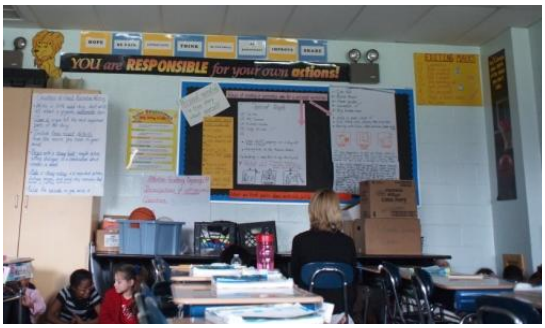
＜見学工程＞
13：15　学校到着
13：15～15：20
　3 班に分かれて 2 クラス見学
①　　3 年生 →4 年生　押谷・伴・飯野
②　　3 年生 →1 年生　伴夫人・高橋
③　　5 年生 →4 年生　ブラウン氏・醍醐
15：30　～17：00（予定は 16：15 まで）
　学校長からの説明・質疑応答

到着早々に 3 班に分かれ、クラス見学へとなった。②に参加したため、そこでの見学内容について以下述べていく。

まず案内された 3 年生の教室では、「これから朝行われたプログラムの続きを行うので、一緒に参加して欲しい」と教室の奥で児童と共に円を作って床に座った。まず、簡単な自己紹介の後に、「春がやってきたわね。そこから思いつくことを発表していきましょう」と先生が提案する。各々「春と聞いて思いつくことは・・・」と発表していく。発表者に対しては「いいね（同意）」「質問」など手をつかったジェスチャーで参加していく。児童たちの答えは「花が咲き始める」「スポーツをし始める」「私の誕生日」などが主であった。メディア（主に映画）を通して知る限り、アメリカの学生は自分の主張を堂々と発表するものと思っていたが、声が小さい児童や恥ずかしがっている児童を見受けて、日本の児童と差ほど変わらないように感じた。しかし、日々の自分の考えを人前で発表する活動や機会を経て、彼らは変わっていくのだろうと感じた。私は自分の番に自分の名前が春という意味だと話すと、淡々としていた雰囲気が急に和らいだ。彼らにとって、円を作ってみんなの前で発表し、人の意見を聞くという活動が日常化し過ぎており、もしかしたら飽きているのではないかと察した。このような活動をする際は、不定期にでも刺激を与える意味で、ゲストを迎え入れても良いように感じた。その後、避難訓練を挟み、終了時間までゲーム形式のプログラム「knock knock there」が行われた。円の中心に目隠しをした児童を椅子に座らせ、背後から 1 人の児童がノックする。「そこにいるのは誰？」と問い、ノックした児童の発言（3 回まで）を頼りに、その児童が誰かを当てるというものである。ゲーム終了後、正解した児童には先生からインタビューがあった。「どうして分ったの？」という問いに「家が近所だもの」「彼がふざけているときの声を知っているから」などの答えがあった。このゲームを通して、先生は友だちの声をよく聞こうということと、見えない活動を通して声の情報はとても大切だということを児童たちに説明していた。児童たちは、楽しい活動ばかりに気を取られて

いたように思うが、教師側が児童たちの関係を見る機会にもなるのではないかと感じた。

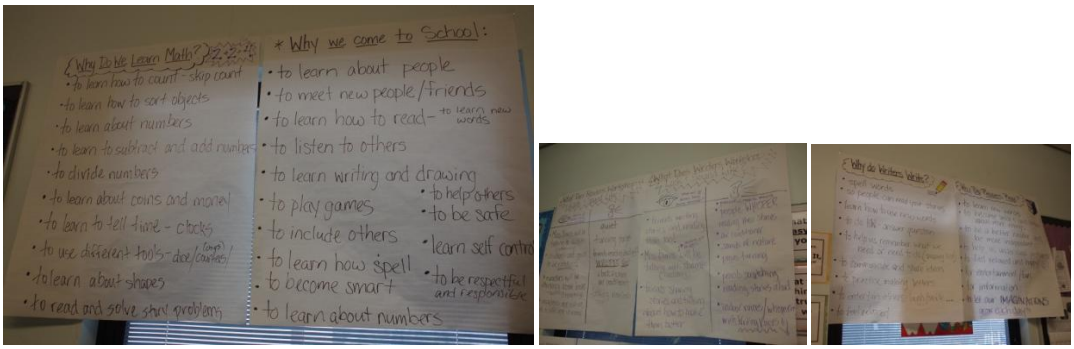
次に、1年生の教室へ案内された。カフェテリアに行っているからと、児童が来るまで、教室を見学させてもらった。なんと言っても、華やかである。原色の色紙がふんだんに使われ、教室を横断してたくさんの飾りや児童たちの作品が連なっている。



避難訓練で机の下にもぐる児童たち。壁面には UNITY WORDS が掲示されている

カラフルな掲示物や児童の作品が飾られた教室

昨今、日本の教育現場では、児童の気が散らないように極力板書の周りに掲示物は貼らないとしているが、正反対であった。幼稚園を思い出させるようなかわいいらしい掲示物ばかりで、気分が晴れやかになった。子供たちも安心しきった表情で教室に戻ってきた。日本で小1プロブレムが叫ばれる中、教室の雰囲気（ディスプレイ）を工夫することも一つの手段かもしれないと感じた。また、強く共感した掲示物は以下のものである。



なぜ学校に来るの？　なぜ算数を勉強するの？などの掲示物

「なぜ学校に来るの？」「なぜ算数を勉強するの？」という問いと答えが掲示されていた。私はこのことに感動を覚えた。児童たちは根本的に学校には行かなくてはいけない、学校に行くことが当たり前と思っているのではないだろうか。しかし、高学年に連れて「なんで学校に行かないと行けないのだろう？」と疑問に感じ、心の中で葛藤する児童は多いはずである。私は常々、教育の目的をもっと児童に直接伝えるべきだと思っていた。その方が教育効果は高いのではないだろうか。今回のニュージャージー学校訪問でこの掲示物を見たときに「これだ！」と思った。この掲示物について先生にお話を伺えなかったのは残念だったが、児童と接する機会が少なかった今回の視察の中で、どの学

校の児童も学校や自分が何に取り組んでいるのか（この場合、キャラクターエデュケーション）を明確に自覚していたことが印象的であった。それは日常的に行動の理由づけを明確化されているからではないだろうか。このことはとても興味深かった。

児童たちが教室へ戻ってきてからは、理科の「巨大動物について」のグループ学習を見学させてもらった。班ごと（4 班）に課題が用意されており、その課題を班の友だちと協同で進めるといったものであった。日本でもグループ学習は一般的だが、班ごとに違う課題が用意されており、それをローテーションでこなすという形式ははじめてのように感じた。ここで、先生は班員をどのようにするかは日々の生活態度を考慮してバランス良く決定していると話していたが、やはりその児童把握は大変であると日本の教師と同じ悩みを抱えていた。児童の活動を見学させてもらったが、協同ではなく、ほとんどの班で、課題ができた児童のものを写していたのが実態であった。また 1 年生にしては難しい問題や、理科の学習というよりは算数の問題ではないかというようなものが用意されていた。先生が自由に教材を用意できるとは言え、的がずれているようにも感じた。

4 班に分かれて各々が与えられた課題を友だちと協同で行う

クラス見学終了後は、校長先生などから説明・ビデオ上映・質疑応答の時間が設けられた。主な内容としては事前レポートでも記載していた通り、レスポンシブクラスルーム（Responsive Classroom）やホームグラウン（Home-grown）、コアキャラクターワード、コミュニティーサービスなどについてであった。コアキャラクターワードとは別に児童自らが選んだユニティワードの一覧表があり、1 年生・2 年生のワードとその他の学年のワードが記載されていた。1 年生は【COOPERATE, SHARE, BE KIND, LISTEN, IMPROVE】これに加え 2 年生では【BE RESPONSIBLE, BE TRUTHFUL, TTUST, CONSIDER, ACCEPT, BE FAIR,RESPECT, THINK, SUPPORT, HELP 】3 年生以になると 1・2 年生のキーワードと【APPRECIATE, THANK, CELEBRATE, GIVE, HOPE, LOVE, CARE, DISCUSS, FORGIVE, UNITE】である。その内容はきちんと教室に反映されていた。

児童が選んだ UNITY WORDS は教室に反映されている

その他、校長先生の旦那様含め退職された方々がサポートするスターズやボランティア保護者の方々などのコミュニティーとの重要性も話してくださり、有意義な時間となった。

Patricia 校長先生と訪問をコーディネートしてくださった Brown 先生

2012 年 3 月 21 日（水）

Eldridge Park Elementary School

＜見学工程＞
07：30　学校到着
07：30～　通学見学
08：10～　朝礼放送見学
08：30～　クラス見学
10：30～　3 組に分かれて校内見学
（児童が案内役）
12：00～　会食

朝食を摂らずに登校する児童が 5 名おり、そのサポートプログラムや朝礼放送の見学のために早朝から見学がはじまった。

児童たちは登校すると体育館に集まり、先生と一緒に教室へ移動する。体育館では児童たちとほんのわずかであるがコミュニケーションをとることができた。小学校 1 年生の彼らはゲームキャラクターのフィギアを鞄から取り出し、人形遊びをしていた。「このキャラクターを知っているの？」と聞くと「マリオ！」「ヨッシー」と元気よく答えてくれた。「僕、ＤＳ持っているんだよ」「私はＷｉｉを持っているわ」とゲーム機で遊ぶのが日常の様で、日本の子供と変わらない印象を受けた。

授業まで編み物制作活動をする児童と先生

次に、朝礼放送が始まった。各クラスで児童たちはＴＶ放送を観る。そこには校長先生が今日は日本からゲストが来ていること、（お土産の）タペストリーを紹介し、日米の友好について話をした。その後、ＴＶ画面の先生と児童たちの体操に倣って、教室の児童たちも体操を始めた。日本の全校朝礼とラジオ体操風景のようであった。

朝礼放送を観ながら、体操をする児童たち

その後、クラス見学へと駒を進めた。前日に見学した学校と同様に、教室内で円になって地べたに座り隣の児童と握手を交わしながら挨拶をするというものである。

隣の児童と握手を交わし挨拶をしていく

次に、ある児童が持参した写真を提示しながらスピーチをし、他の児童が質問をするというものであった。

児童が写真をもとにスピーチし、他の児童が質問をする（1 年生）

共に、他の学年・クラスでも行われおり、継続して実践していることが伺い知れた。

このクラスでは「STAR STUDENT」と呼ばれている。自分の興味あることや活動について発表していた（3 年生）

また、まさに「問題解決学習」が取り入れられ行われていた。日本の思考力を主とした問題解決学習というよりも、実生活で起こり得る課題を議題として取り上げ、それについて解決方法を考えるというものである。今回は「謝る」についてである。「謝るとはどういうことか？」との問いの後、1 枚の写真（図書館で珈琲を持っている男性がそれをこぼしてしまった）から、このあと彼はどうするべきかを考えていく。そこでは、解決する方法の手順が書かれたポスターに沿っているかどうか確認しながら進められていく。ポスターには、その解決方法は公平で、周りの人をハッピーにするものであるかどうかなどが示されている。クラス全体で考えた後、先生がランダムに選択した児童 2 名 1 組に、課題を与え、その状況で自分ならどのような解決方法を考え、選択し、行動するかを発表する。もし、選ばれても自分はできないと判断した場合、児童は「パス」と言うことができるようになっていた。日本の道徳の時間に似ているように感じたが、日本よりも問題が具体的かつ直接的アプローチで、解決方法もよりシステマティックに物事を進めていくように感じた。

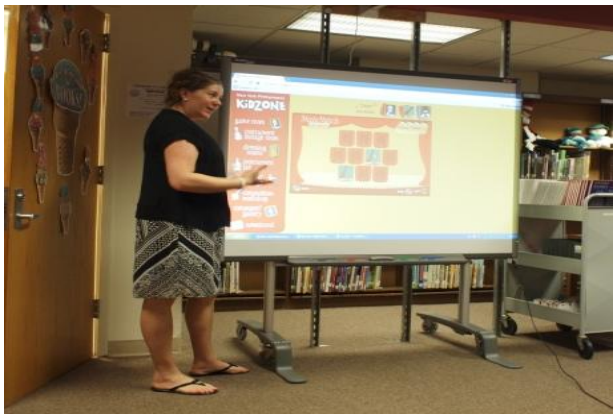
How to Solve Problems

1. What is the problem?
2. What are some
3. For each solution,
   Is it safe?
   How might people feel happy?
   Is it fair?
   Will it work?
4. Choose a solution and use it.
5. Is it working? →Yes!
   ∟If not, what should I do now?

問題解決への手順が書かれたポスター内容

問題の解決方法を考え、発表している児童

クラス見学後は図書館で先生から電子黒板の説明があった。通常の板書のように書き込めるほか、先生や企業が作ったプログラムを活用できる。日本でも取り入れられ始めているし、今後主流になってくるのだろう。



電子黒板を実演してくれる先生、校内に３台設置済みとのこと

その後は児童の案内で校内見学へとなった。校内にはキャラクターエデュケーションプログラムの掲示物がいたるところに掲示されており、その説明を児童たちがしてくれた。つまり、児童たちは自分たちに与えられているこの教育プログラムを理解していることになる。案内役に選ばれた児童は学校内でも優秀な児童であるとは思うが、彼らの説明や質疑に対して応答してくれた様子を見ると、プログラムの意義を自覚しており、それが自信となっているように見えた。

まず、訪問前週の金曜日に行ったものだという「私が人と違うところ」のプログラムを紹介してくれた。自分と人は違う、それで良いのだということを学ぶプログラムとなっている。

「私の違うところはブロンドヘアーのところ」小１の児童

その他に、毎月良い行いをしている児童を表彰する「KID OF CARACTER CARING」も校舎に入ってすぐのところに掲示されている。学校の Web サイトにも掲載されており、説明をしてくれる児童は「1 度だけ僕も表彰されたんだ」と誇らしげであった。

学校の Web サイトにも掲載されている

その他にも、たくさんのキャラクターエデュケーションプログラムで児童が行った作品や、その行いを表彰するものが多々掲示されていた。その中でも、多数掲載されていたのが「EPS Character Trait of the Month」である。毎月目標とするワードが掲示されているとのことである。今月の目標は「Fairness」であった（毎月目標が変わり、校内の色々なところに掲示されている）ので、自分の行動が「Fairness」だと思うかどうか案内役の児童に尋ねてみた。意気揚々に「もちろん」と答えるかなと思っていたが、良い意味で予想を裏切ってくれた。彼女は数秒間考えた後に、「そうありたいと努力しているけど、校庭で遊ぶ時の場所取りで、たまにそうできないときがある」と素直な気持ちを答えてくれた。学校が与えているプログラムが偽りや押しつけでなく効果的なものであるように感じることができた。

キャラクターエデュケーションプログラムの掲示物

2 日間見学してきたどの学校にも言えることであるが、キャラクターエデュケーションプログラム・活動を通して、児童たちは人間形成されていくと同時に、そのプログラムそのもの自体を理解し、プログラムを受けている自覚が彼らにとって自信につながり、さらに効果を挙げているのではないかと感じた。